第2回定例研究会

私の下水道心象風景

―絵図、写真などにみる下水道の足跡―

平成十年二月二十七日　十八時三十分から
新宿　日本水道協会　会議室

東京都下水道局砂町水処理センター
所長　地田　修一

司会：　今晩は、これから第2回定例研究会を行います。地田修一所長にお願いしてあります。地田所長は、東京都下水道局の砂町水処理センター所長です。その前は、技術開発課長、施設管理課長と歴任されています。下水道界でのご活躍は皆さん良くご存じのことと思います。

最初に地田所長とお会いしたのは、私が下水道局の三河島処理場に勤務しているときです。当時、地田所長は、北部第一管理事務所業務課長でした。私は、丁度そのころ下水道局文化会で発行している機関誌「水声」の編集委員をしておりました。同じ編集委員をしておりました、この会の会員でもあります栗田彰さんから、埋草で「明治のトイレのことでも書いてください」と言われました。明治二十九年の建築ですが、そこにはすでに水洗トイレが設置され、排水は上野の不忍池に繋がっている、湯島の岩崎弥太郎邸に行き、調査し記事を書きました。その記事はシリーズと言うわけではないのですけれど続いてそのあとに、「銀座の煉瓦街の下水道」の事を書きました。その中で、材質について「排水溝に伊豆石、房州石」の事を書いたのですけど、そうしたら地田所長があの記事は少しおかしいのではないか

といろいろ情報を下さいました。その後もいくつか無理して書いていましたが、いろいろアドヴァイスを下さいました。

同じく「水声」の中で、下水道局のOBにインタビューする企画がありました。地田所長は「OBに下水道の歴史を語ってもらい、記事にしたら」という事を言われました。そこで地田所長の紹介で下水道局のOB、中島永次さんに「下水道の管渠」の話をしていただきました（平成二年のことです）。これは大変驚いた話ですが、昭和の初めから正確に下水のことを生き生きと語ってくれました。余談ですが、「なかじまえいじ」という名前は勿論かの「中島鋭治」氏を意識してお父さんがつけられたそうです。次に田淵虎造さんに「下水工事で初めてシールド工法を採用したときのこと」を話していただきました。これも大変な話でした。そして、小沢勇太郎さんに「設備の話」をしていただきました。さらに藤井秀夫さんに「下水処理」ということを話していただきました。ともに、奥の深い話でした。最後に新保和三郎さんに「新聞の記事からみた下水道の歴史」を話してもらいました。それぞれが素晴らしい話でした。

これらの話は下水道局文化会の機関誌「水声」に8回にわたって連載（平成二年～五年）しましたが、その後、地田所長は、これらの話と江戸の町の下水道の話を一冊の本にまとめました。それが、技報堂から出版された「江戸・東京の下水道のはなし」です。この本は、東京の下水道の話ですが、司馬遷の史記のような雰囲気を持った本だと思います。歴史を年表風に語るのではなく、人物の口を通して下水の歴史に対する思いを実に生き生きと語っています。

そして、この本のプロローグとして地田所長が書かれた、これも大変面白い話ですが、この話を、本日詳しく話していただくことになっています。これは下水道とかトイレにまつわる所長の経験談を資料を通してまとめた話です。地田所長は「当時時間がなくて十分調べられなかったのですが、調べなおしてみたら間違っていなかった事がわかった」とおっしゃっています。

それでは地田所長、お願いいたします。

地田所長：　ただいま紹介に預かりました地田です。先程も話がありましたが、下水道局文化会の「水声」に石井さんから何か書いてくれないかと言われました。どの様なものにしようか考えましたが、「ＯＢの方に様々な体験を話してもらい、最後に現役へのメッセージを言ってもらう」形式にしました。こう言うのを「聞き書き」と言います。「聞き書き」は、話し手が誰かによって九十パーセントくらい良し悪しが決まってしまいます。幸い、良い話し手が次から次へと見つかり、「水声」への連載が続きました。ある程度の分量になったので本にしようかと出版社を何社か廻ったのですが、そのうちの一社からアドバイスを貰いました。それは、「うちの編集方針には合わないが、こういう内容ならば、徳川家康がひなびた漁村であった所に、新しい都市計画に基づいてつくったのが江戸の町なのだから、江戸時代にまでさかのぼって下水道の歴史をたどってみると面白いのではないですか。」ということでした。当時から栗田さんのことは江戸時代の下水道の歴史にくわしい方であると言うことは存じあげていましたので、この部分を栗田さんにお願いしました。そして、全体をまとめる意味で、「私が体験した下水道、トイレ、排水のこと」を書くことにしました。「聞き書き」を応用した口述筆記の方法でプロローグとしてまとめました。その時調べ足りなかったことを中心にプロローグに書いた文章の検証をその後行ないました。今日はその結果をお話します。

下水道の歴史を探る手法について

　栗田さんと汗をかきながら本をまとめていたときに気がついたのですが、歴史の見方の一つに古いものがだんだん改良されて新しいものになっていくという進化論的な考え方がありますが、下水道の歴史を調べていくとどうもそうではなく、和風、西洋風、古いもの、新しいものすべてが、全部同時期に平行して存在しているのではないかということです。言い換えると多様性に富んでいるということです。私は学生時代、魚のことを勉強していましたが、生態学では多様性と言う言葉は重要なテクニカルタームです。多様性は、進化とか古いとか新しいとかは言いません。様々な形態や行動をすみ分けへの適応であるとして容認するのです。このへんが本日の話の

キーワードです。

歴史の調べ方の一つである「聞き書き」は、そのまま方言や何から何まで話してもらったとおりに記述するやり方と、聞き手が整理し読みやすくするやり方とがあります。後者の場合は、補足、入れ換えをして話の流れがスムーズになるようにします。勿論、話し手の了解を取りつけますが。また、「聞き書き」の良い所は裏話が聞けることです。我々も、原稿用紙に向かっているとどうしても、美辞麗句が並び、本音が書けません。その点、聞き書きは臨場感をかもし出すことのできる良い手法です。

最近また、「水声」への記事を頼まれまして、「写真を読む」と言う新しいシリーズを始めました。これは現場の経験が豊富な人に頼んで、古い写真を見てもらいながら思い出されたご自分の体験を好きに喋ってもらうのです。「下水管渠の清掃」について写真をみながら話してもらった後、葛西処理場に保存してある管渠の清掃道具をお見せして、様々な道具の使い方を聞いたことがありました。道具の使い方などは、出来ればビデオで録画しておけば動きが分かり貴重な史料になります。工具や道具を残しておくことは重要なことです。きわめて具体的な作業という新しい視点から、下水道の歴史を掘り起こす可能性を持った大変重要な物証です。

ここには江戸の下水文化を研究しておられる、栗田さん、柳下さんがおられますが、江戸時代の文献は、下水というテーマで探しても記述がありません。栗田さんは川柳を材料に丹念に拾い出して調べ、「江戸の下水道」という本を出されましたが、苦労が多かったと思います。絵図を調べるやり方もあります。多くの読み本や浮世絵などが出版されました。読み本は字だけでなく、絵がついています。これらの絵図を丹念に拾うと貴重な情報が見つかります。時代はさかのぼりますが、絵巻物にでてくる絵も当時の社会生活を描写しています。さらに、柳下さんのように古文書を読み解いていくやり方は専門知識がなくてはできませんが、役所の文書が多く残っていますので沢山の史料が発掘される可能性があります。

私がプロローグを書くときに参考にしたのは、各種の写真集に載っていた古い写真でした。写真を見ていると様々な記憶がよみがえってきますし、写真

には撮影した人が意図した以上のたくさんの情報が盛り込まれていますので、有力な史料となります。

最近出ました下水道協会誌一月号では、「文化歴史の保全と継承」を特集しています。谷口さんや考古学者も書いています。それを読んでいてふと思ったのですが、最近流行の自分史を史料として活用することも可能なのではないかということです。町の図書館にも寄贈されたものがおいてあります。自分史の中にも重要な歴史情報（特に社会風習に関して）が潜んでいることがあり、下水道史の発掘にも繋がると思います。私の書いたプロローグも言ってみれば下水道に関する自分史です。

下水道関係のことは多様性があるので、自分の住んでいる町だけではなく、出張で立ち寄ったよその町で、また世界を旅したときの外国の街角等で、過去のものと思っていたものから最新のものまでの様々な様式を現実のものとして見ることができます。その点、鈴木清志さんの「世界のトイレ」（第4回下水文化研究発表会）はユニークな視点での発表です。

下水路の歴史の香りを尋ね歩く

私が育った家の辺りでは、三軒に一つ位の割合で共同井戸がありました。図－1は江戸の長屋の様子です。路地があり長屋があり、私が育った家の付近に似ています。特に、下水が似ています。素掘りの排水路があり、表の道路側溝に流れ込む形式です。その後水道が引けたのですが、水道が引けると家の台所で米をといだりするので排水の質が悪くなります。狭いながら庭がありましたので、排水溜め方式と言いますか、穴を掘り、そこに雑排水を流入させて地下に浸透させていました。江戸時代の初めでは、会所地の一画に穴を掘りそこに排水を流していたそうですが、それと全く同じやり方です。雨水だけが道路側溝に流れ出ていったのです。

これは、江戸時代の共同トイレです。図－2の真ん中より少し左です。図－28を見ると江戸と関西とで少し違います。右が江戸の共同トイレの形式です。ついでに、この絵の井戸は実は水道です。地下に自然流下の暗渠の水路があり、竹竿の先に桶を付けて水を汲み上げていました。

屋根に降った雨水ですが、図-3の浮世絵を見る

と竹製の樋、図-4は樋を売る職人さんの絵です。工具を持っていて樋を売るだけでなく設置もしてくれました。図-6はモースの絵です。このような雨樋を通って雨水は、図-3にあるような道路側溝に排水されていました。そして、雨水を天水桶に貯めて有効利用していました。図-5の絵で、商店の軒下にあるのが下水路（道路側溝）です。江戸の町は町毎に木戸があって木戸番がいました。往来の激しい所は下水路に蓋をかけました。図-7で、写真の左にあるのが天水桶です。これは江戸東京博物館で復元したものの写真です。火事の時、水を汲むための手桶がおいてあります。このことが文献7の小説の中で描写されています。北原亜似子さんの文です。深川での用水桶のこと、火を消し止めたこと、木戸番のことが書いてあります。小説は歴史的な事実を具体的に表現してくれます。人間の動きが生き生きと語られているので、イメージをふくらませることができます。

江戸時代は、下水と言えばほとんどが雨水排水のことでした。水は井戸から汲んで来るので大切に使いましたので、雑排水はほとんど出なかったのではないかと思います。特に、深川、本所地区は井戸水に塩分が含まれていましたので、飲料水は水売り屋からわざわざ買っていましたから無駄にしません。食物だってゴミにするようなことはしません。したがって、雑排水の汚れはそんなに問題になりませんでした。時代はずっと下りますが、私の勤めている砂町処理場で、昔（戦後まもない頃）第一沈澱池で職員が泳いだとの話が残っています。

下の文は江東区のお年寄りの話で、「引き潮になると水門を開けて、中の水をグワーとはきだす。潮が上がってくると、閉めて……」。江戸時代から続いている下水路の水門を開閉する人がいたのです。次は別の人の話で、「満潮のときは水門を閉めまして、干潮になる

どぶのこと

亀戸から、五之橋から進開橋までの五之橋通りは、昔は狭かったねえ。片側はどぶですよ。進開橋のところに水門があって、係がいてね。引き潮になるてっと、水門あけて、中の水をダァーッとはき出す。潮が上がってくんと、閉めてだから、どこの細い道を入っても、道の片側にかならず水路があったんです。

近くに、熊の入といって、熊野神社をまっっておった水門がございまして、満水のときは水門を閉めまして、干潮になると水門を開けるんです。それで、大雨の後は水を金部はかせるのに、一か月半くらいかかりましたかな。

と水門を開けるのです。それで大雨の後は水を全部はかせるのに、一ヶ月半位かかりましたかな」。図-16の写真は、埼玉県のある水路を復元したもので、水門が見えます。図-17の絵は、「春日権現験記」という絵巻物に出てくる水門です。こんな門型で、真ん中のせき板を人力で上下させて、水を取水したり排水したりしていました。下の文は、江東区での関東大震災後の話で、「満潮になりますとね、下水からね、ボコボコボコボコ、水が出てくるわけ。…五十センチメートル位になる。市電が走っていたが三十センチメートル位なら平気で走っていた。地盤沈下が起こっていたのです」。砂町処理場は昭和五年の稼動ですから、まだありません。次の思い出話では、「震災後、浄化槽が出てきて水洗化が早かった」と。しかし浄化槽の本を調べてみると、どうも改良便所による水洗化ではないかと思います。今の厚生省が推奨したものです。図-11は南割り下水です。昭和五年頃の写真です。写真の下水路の擁壁は木製で、この写真は下水管をこれから入れようとしているところです。下水路の左手には工事用のトロッコのレールがあります。この下水路は、江戸時代の初めにすでに開削されていました。汲み取りし尿が貴重な肥料として使われていた時代です。

図-9、図-10はモースの絵です。図-9は神田の中流の家、図-10は明治になってつくられた新しい長屋で、ともに家の前に下水路があります。モースは「素掘りで、板で囲った下水路が多く使われていた。」と言っています。こういう文章から察すると、

震災後の街づくり

深川は徳川時代から開けていたから、わりに下水道は出来ていた。満潮、干潮って、満潮になりますとね、下水からね、ボコボコボコボコ、水が出てくるわけ。下水から、一メートルじゃないけど、五〇センチぐらいはね、電車道に出ちゃう。そうすると、電車がチンチン走ってるでしょ、五〇センチになると止まるわな。三〇センチまでは走るんですよ。水けむりをたてて走るんだよ。

毎月、旧の一〇日ごろから一七日ぐらいまで、大体上げ潮になっていて、一週間ぐらいはね、時間が満潮の、その時間があるんだよ。例えば一二時、そのあくる日は、今度はちょっとさがって、一時満潮とか…。そうすると電車が水しぶきを上げてね、チンチンって走ってくる。それに雨なんか加わると今度、電車が通れなくなる。そういう具合に、深川の地区は地盤が低かった。

大正一二年、私が五年のとき関東大震災ですね。そのあと、変わりましたね。

震災後、浄化槽がね、出来ましたよ。ここが一番早かったんじゃないですか、水洗が。それから、道が基盤の目になりましたよね。まっすぐに。で、抜けられない道ってのがなくなりましたよ。私道のおもてには、必ずね、「この道は抜けられます」って書いてあるんですよ。ええ、それでないところはね、抜けられないです。突き当たりになっちゃうんです。

銀座の煉瓦街、神田下水等は突出したモデル事業だったと言うことになります。

図-12は一遍聖絵の鎌倉の町並みです。上は家並、真ん中は道路、下も家並です。下から1／3位のところの水路に橋がかかっている。多分、排水路ではなく、図-13の写真と同じ用水路と思われます。図-13は明治十年の写真で、街道の真ん中に用水路があって、洗い物や水を汲んだりできるようになっていました。栃木と鎌倉の町づくりが、時代はだいぶ離れていますが、同じようになっていたわけです。図-11の南割り下水は人工的な排水路です。下水路の両脇に道をつけたので、広い道路の真ん中にあるようにみえます。図-15の写真は静岡県の街道沿いで、両側に排水路があります。私の田舎の柏崎も、ほぼこんな形の町並みでした。日本海で雪も降るし、雨水の排除を重点にしています。

真ん中に用水路があるのは通行上不便だし、水道の普及で用水路が不用になったこともあり、江戸のまちでは道路の両脇に下水路がありました。時代、時代で変わります。江戸のまちでは、水路を利用して物資を運んでいたので、川や運河は船の航行をスムーズにさせるために奇麗にさせていました。柳下さんの本にも出てきますが、神田川に流れ込む下水路では杭のスクリーンでゴミを取らせていました。

図-14は、石山寺縁起に出てくる「雨おち」の溝です。建物の屋根からの雨の滴が溝に落ちて排水される、非常に古いやり方です。お寺や神社には雨樋が無いので、今でもこんな風な溝（玉砂利を敷き詰めてあることが多い）が建物の廻りにあります。また、農家の茅葺き屋根も雨だれがポタポタと落ちますので、家の廻りに溝があります。

トイレの歴史を尋ね歩く

トイレのことになると、がぜん資料になる本が増えてきます。原書的なのは図-18の餓鬼草紙の絵が有名です。出典は「絵巻物による日本常民生活絵引（平凡社）」ですが、平安時代に描かれたものです。図-19は今でもこういう光景を目にします。小便は人が見ていなければ…という風習。明治になってお上の力で止められました。明治政府が外人から苦情を言われたからとか。次は文献6（田辺貞之助）に出てくる文です。「子供のころお父さんと一緒に立

ある晩、この中徳で買物をして、父が「どぜう」で一杯のんで外へ出ると、もうポンポン蒸気がなくなっていた。それで、小名木川の土手を歩きはじめた。が、いつもおそくまで明りのついている家々がどこも戸をしめて、明りひとつ洩れていなかった。

父は「この暑さなのに、どの家もずいぶん早寝だなあ」とつぶやきながら、「どうだい、この辺で小便をしていこうや」と云った。私も父と並んで小便をした。そして、歩き出そうとしたら、横丁から白い姿が出て来て「ああ、こら、こら」と云った。巡査だった。あの時分には、夏になると巡査は白い服を着た。

巡査は「わしの見ている前で小便をするとは怪しからん」と叱言を云って、罰金を即決で五十銭とった。ちなみに、当時は米が一升三十銭ぐらいだった。

父は罰金を払ってから、どうして今夜はどの家もこんなに早寝なのかと聞いた。すると、巡査が「この近所にきのうコレラが出たので、近所の者を全部立ち退かせ、わしが非常線を張って見張りをしているのだ」と説明した。

私たちはびっくりして、死の町を鼻をつまんで駆けぬけた。巡査に云われて気がついたのだが、石炭酸の匂いがぷんぷんして、鼻をつままずにいられなかった。それに、鼻をつまんで息をしないほうがいくらか安全のような気がしたのであった。まるでコレラが鼻からはいるように。

ち小便をしていたら巡査に怒られ、五十銭の罰金をとられた。……その後、町が静かなので尋ねるとコレラが流行った為で皆避難したということであった。」大はトイレで、小は立ち小便という風習が残っていたのです。明治の終わり頃の話です。

平安時代では、京都の町中でも一般民衆は図-18の絵のようであった。貴族も中国や朝鮮の宮廷の風習を真似てトイレをもたなかった。図-21はおまる、図-20は尿筒（しとづつ）と言う竹筒のしびん、会議の最中でも中座して廊下などでこれらを用いてすましていたということです。寝殿造りの建物ではトイレが無いのです。

図-30から家の間取りの絵があります。図-30は農家、○を付けた母屋から離れたところの先にトイレがあります。馬、豚、鶏等の家畜を飼っている近くです。図-31は江戸時代の下級武士の家の間取りです。廊下ずたいに湯殿とトイレが近接しています。図-32は明治十年の住宅です。図-31と変わらないがトイレが母屋に近づいています。図-31の江戸時代から家屋の中のトイレは大、小が別々になっていることが分かります。この当時は、台所とトイレは離すのが通例です。汲み取りトイレだったからでしょう。現在は水洗化すると、水回りとして同じ場所に集められますが。

トイレのルーツを調べてみました。「トイレの考古学」によると、縄文後期では二つの方法があったようです。一つは素掘りの穴（もっとも素朴な野糞も含む）、もう一つは下に水が流れている所でする水洗式です。図-23は素掘りのもので平安末期か、

鎌倉の初めのものか。時代が下ると下に瓶を入れた汲み取り型になります。水洗式のものは、高野山、永平寺等の寺院に近年まで引き継がれていました。

図-22は洛中洛外図屏風に描かれた、京都の外トイレです。図-23も外トイレです。図-24～図-27は昭和中頃の農家のもので、それぞれ撮影年が示されています。図-24は外トイレ、図-26は母屋に入るところにある小便用の外トイレです。図-27は女性も立ってする風習の実景で昭和四十年頃まであったようです。これは岡山の写真ですが、関東、東北にもありました。太宰治の小説「斜陽」にもこのことがエピソードとしてでてきます。図-25は大をした時拭くのに使った薄い板の「ちゅう木」です。一度使ったものも洗って再使用していたらしい。奈良時代では紙が貴重で文字を板に書いていたが、それが用無しになった後、ちゅう木として用いています。トイレと思われる穴から出てきた板に字が書いてあったと「トイレの考古学」に書いてありました。昔は新聞紙をトイレット用に使っていたことがありましたが、それと同じ発想です。図-29は電柱の下の建物が公衆トイレです。場所は大阪です。公衆トイレは江戸時代にもありました。縁日で人が多く出る時には、肥え桶をたくさん置いておきました。肥料として使われていたのでお金になったからです。

図-35の漫画のように明治の東京の町では、肥え桶を大八車で運ぶ風景が日常的に見られました。図-35に、天水桶が描かれています。漫画家は感性が鋭いので時代を見抜き単純な線で社会を表現しています。漫画もよく見ると情報が詰まっており面白いです。図-36は船そのものがし尿の貯槽になっています。こういうタイプの船は江戸に多かったです。図-37は船に肥え樽を積んで運んでいます。北区の区史でも志茂の半農、半し尿運搬のことが記載されています。郷土史の中にも数多くの史料があります。図-38、図-39はトラックの時代のし尿収集です。こうやって載せていたのです。図-39はバキュームカーのはしりです。

戦時中のし尿処理処分の苦難の歴史

図-40～図-46の史料は私が探したものと、石井さんが探してきたものとが含まれています。図-40の表は貴重な情報です。太平洋戦争中のし尿処分の状

況を示しています。下水道と、し尿の汲み取り、処理、処分との関係が良くわかります。農村還元はし尿を肥料として使うこと、農村汲み取りは農家が汲み取ることです。し尿を海に捨てる海洋投棄船は写真にあるような大型船です。しかし、戦争が激しくなるとこの海洋投棄船は燃料不足のため使えなくなり、し尿の処分に大きな影響を与えることになりました。綾瀬とあるのが、図-43、図-44に示した東京市の清掃課綾瀬作業所（昭和八年から昭和三十四年まで）のことで、今の小菅処理場の所にあったし尿処理施設です。汲み取りし尿を船で持ってきて、綾瀬川の水で二十倍に薄め、散気式活性汚泥法で処理し、汚泥は嫌気性消化していました。発生したメタンガスは消化槽の加温に使っています。このパンフレットは浄化槽関係の人が探してくれました。これは大変貴重な史料です。これから、これを手掛かりに昭和初期のし尿処理技術を調べてみたいと思っています。綾瀬作業所に携わった人を探しているのですが、今のところ見つかりません。当時の東京の下水処理はまだ機械式ばっ気（パドル、シンプレックス）で、散気式は採用していません。散気式は昭和三十四年の芝浦処理場が最初です。

戦争中はし尿の海洋投棄もできず、東京では神田川に捨てたり、庭に浸透させたりと大変な苦難の時代でした。救世主は昭和十九年から始まった西武鉄道や東武鉄道で行われた鉄道によるし尿の運搬です。鉄道沿線にし尿の貯槽を造り、夜、専用の貨車で郊外の農村に運びました。終電後郊外に運び、帰りに農村から野菜を積んできました。昭和三十年まで続きました。図-40で下水道とか三河島とかいうのは、マンホールや投入施設から汲み取りし尿を下水管や処理場に入れていたことを指しています。いま、清掃局で最後に残った汲み取りし尿を森ヶ崎処理場に送って処理処分しようとしているのと同じ考え方です。下水道の役割のなかにし尿の処理処分が本格的に入ってきたのは、この時あたりからではないかと考えています。その前は下水道が普及してもなかなか水洗化が進まなかったのです。そこで、これを契機に補助金を出して水洗化を促進しようという気運になってきました。

「大杉栄の名文とパリのトイレ」というおまけの話

最後に次の資料を紹介します。私は大発見だと思っているのですけれど。古本屋で岩波文庫の大杉栄の本を見つけて買って読んでいましたら、「日本脱出記」の中に一九二三年当時の、パリのトイレのことが書いてありました。その頃は、パリのトイレ事情も大変だったことが読み取れます。「高級ホテルでは湯もあり西洋風呂、西洋便所もあった。安ホテルは西洋トイレではなく、ただ、たたきの傾斜があり底に穴があり…その汚さはとても日本の辻便所の比じゃない」。いかがですか。

私は子供のころからの昆虫好きで、何種類かの「ファーブルの昆虫記」を読んでいるのですが、大杉栄が獄中で訳したものは文章も優しく名文です。このパリの便所と題する紀行記も実に生き生きとパリでのトイレに関する体験を描写しています。

以上いろいろとお話をしてきましたが、これらが「江戸東京の下水道のはなし」のプロローグの内容を検証したものです。ご静聴どうも有り難うございました。

パリの便所　一九二三年四月三〇日、パリにて

彼女と僕とは、グランドホテルなんとかいう名のうちの、三階のある一室へ案内されて行った。なるほど、電燈はたしかにある。が、便所は、室の中にもそとにもちょっと見あたらない。

「便所は？」

僕は看板に少々うそがあると思いながら、いっしょに登ってきたお神さんに尋ねた。

「二階の梯子段のところにあります。」

お神さんは平気な顔で答える。僕も便所が下にあるくらいのことはなんでもないと思って、平気で聞いていた。

が、その便所へ行って見ておどろいた。例の腰をかける西洋便所じゃない。ただ、タタキが傾斜になって、その底に小さな穴があるだけなのだ。そしてその傾斜のはじまるところで跨ぐのだ。

が、そのきたなさはとても日本の辻便所の比じゃない。

僕はどうしてもその便所では用をたすことができなくて、小便は室の中で、バケツの中へジャアジャアとやった。洗面台はあるが、水道栓もなくしたがってまた流しもなく、いちいち下から水を持ってきて、そしてその使った水を流しこんで置く、そのバケツの中へだ。僕ばかりじゃない。あちこちの室から、そのジャアジャアの音がよく聞こえる。大便にはちょっとこまったが、そとへ出て、横町から大通りへ出ると、すぐ「有料の辻便所」があるのを発見した。番人のお婆さんに二〇サンティム（ざっと三銭だ）のところを五〇サンティム奮発してはいって見ると、そこは本当のきれいな西洋便所だった。

貧民窟の木賃宿だから、などと、日本にいて考えてはいけない。その後、パリのあちこちをあるいて見たが、こうした西洋便所じゃない、そして幾室あるいは幾軒もの共同の、臭いきたない便所がいくらでもあるのだ。そして田舎ではそれがまず普通なのだ。

僕はまた、西洋便所とともに、西洋風呂も気持のいいものだと思っていた。が、このトイレ・コンフォルタブルな安ホテルでは、どこの看板にも風呂付きというのは見たことがない。そしてまた、普通のうちで風呂なぞあるのは滅多にない。男でも女でも、みんな一ヶ月に一度か二ヶ月に一度、お湯屋へはいりに行くのだ。しかもそのお湯屋だって、そうやたらにあちこちにあるのじゃない。ちょうど有料の西洋便所と同じくらいの程度に、ごく稀にぶつか

るだけだ。幸い僕は、このお湯屋もすぐ近所に見つけたので、二、三日目には二フラン五〇〔サンティム〕（三十五銭ばかり）奮発して、そこのいいお得意様になった。もう一フラン出せば、その辺では立派な夕飯が食えるんだ。

しかし僕だって、そんな安ホテルで野蛮人のような生活ばかりしていたんじゃない。たいして上等でもないが、とにかくまず紳士淑女のとまるホテルへも行った。

実は、前のホテルが仲間の巣のすぐ近所なので、その辺をしじゅうろついているおまわりさんのびかびか光る目がこわかったのだ。そしてそうそう逃げ出したのだ。

こんどは、室の中で栓一つねじれば、水でも湯でも勝手に使えた。西洋風呂もあった。「西洋便所」もあった。

僕は、さるまたの捨て場所にこまって、そっとこの便所に突っこんで、うんとひもをひっぱってドドウと水を流してみた。うまく流れればいいがと思いながら、だいぶ心配しいしいやったんだが、なんのこともなくきれいに流れてしまった。

「なあに、そんな心配はないよ。フランスの便所は赤んぼうの頭が流れこむだけのおおきさにちゃあんとできているんだからね。」

僕がその話をしたら、友人の一人がこういって、そしてドイツでやはりこのでんをやって失敗した話をした。さるまたが中途でひっかかって管がつまってしまったので、お神さんにだいぶ油をしぼられた上に、その掃除代まで取られたんだそうだ。

時事川柳百新

○ 便所のも足して紙屑屋に談じ　出鱈目（明治三十九年十一月）

○ ヲワイやはよろけてよろけて路次をいで　美蓉（明治四十年）

○ 母親を番にたたせる辻便所　愛坊（明治四十年）

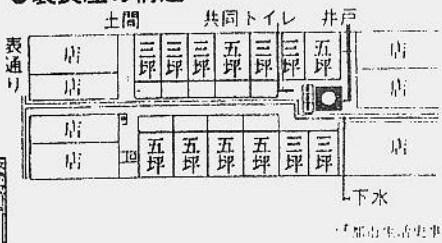
○ 便所には浅草紙ときまっている　義雄（昭和十年）

主な文献

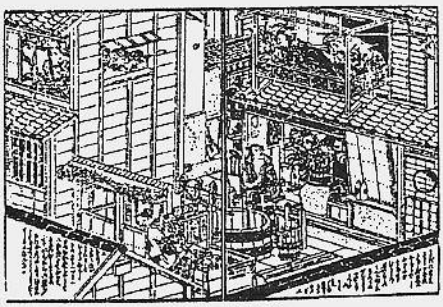
1. 絵巻物による日本常民生活絵図　渋沢敬三編　平凡社
2. 写真で見る日本生活図引き　須藤功編　弘文社
3. 日本人の住まい　E・S・モース　八坂書房
4. 図説　日本住宅の歴史　平井聖　学芸出版社
5. 江東ふるさと文庫　江東区編
6. 江東昔ばなし　田辺貞之助　菁柿堂
7. 深川澪通り木戸番小屋　北原亜似子　講談社文庫
8. 日本脱出記　大杉栄　岩波文庫
9. 時事川柳百新　読売新聞社編　講談社
10. 古典落語　講談社
11. 懐かしき東京　石黒敬章編　講談社
12. トイレの考古学　大田区立郷土博物館編　東京美術

図－1

●裏長屋の構造



図－2

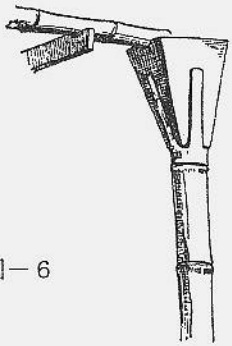


江戸時代の長屋の風景

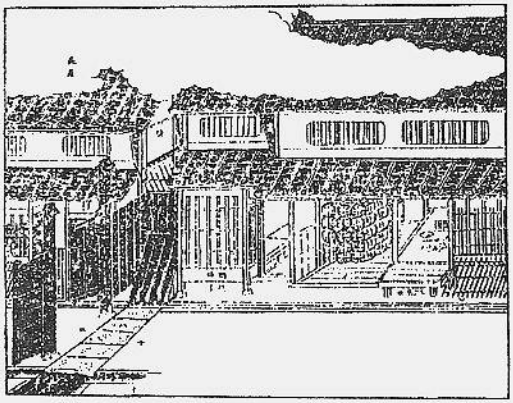
図－3

図－4

図－5

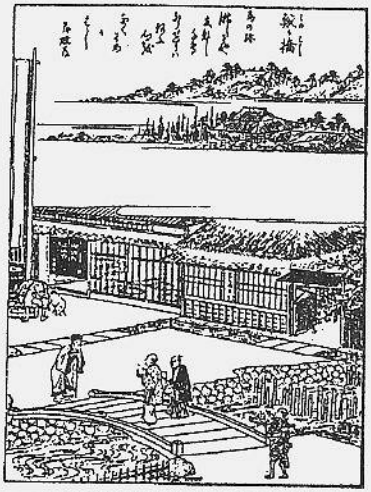


図－6



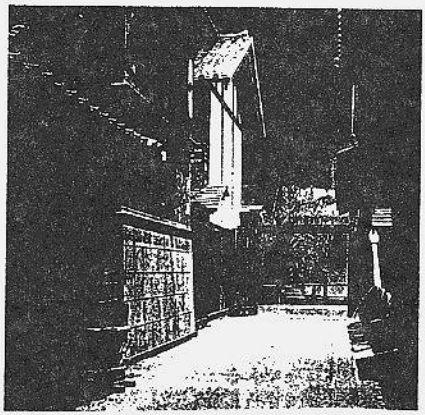
町境には木戸があって、下水が道路を横切っている（「守貞漫稿」）

図－8

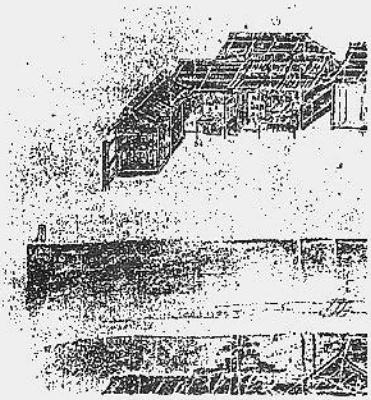


鮫河の中の枕はごみ渡い用のものであろうか
（「江戸名所図絵」）

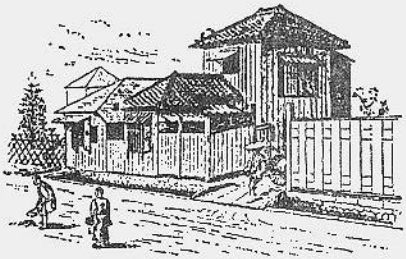
図－7　深川澪通り木戸番小屋



図－１２　一遍聖絵

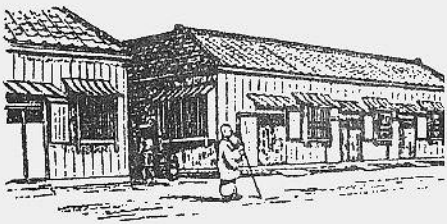


図－９



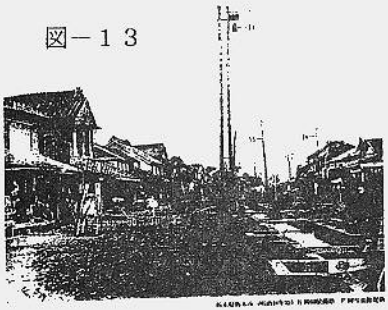
東京市神田区の通り。

図－１０

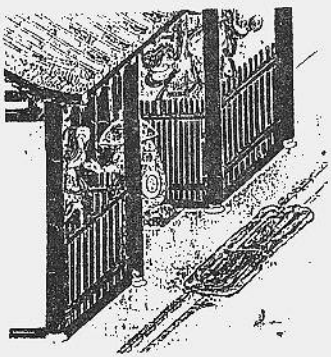


東京にある家賃の安い長屋の巷

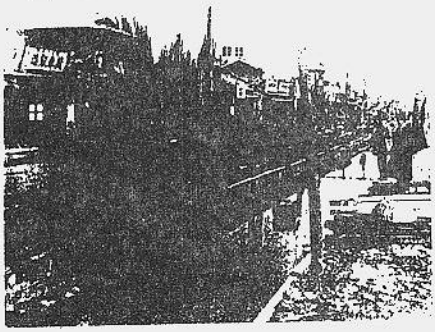
図－１３



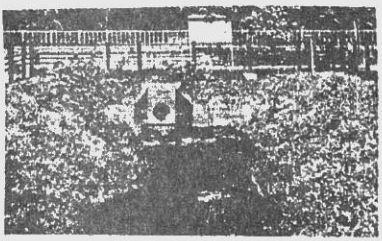
図－１４　石山寺縁起



図－１１　南割下水



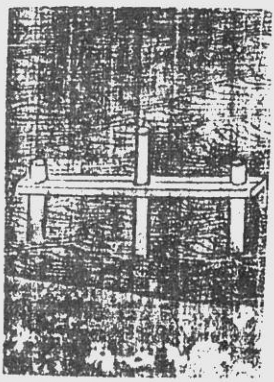
図－１６



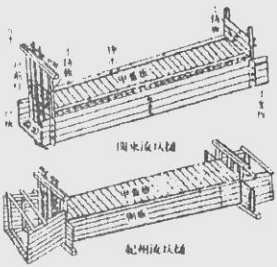
図－１５

静岡県磐田郡佐久間町浦川（大正３年）手掛木橋梁

図－１７



春日橋現物記



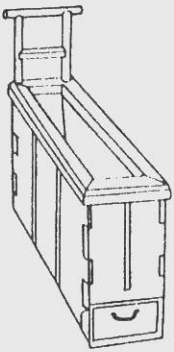
（上・下「変形」日本民俗民生活史事典」所載図）

図－１８　餓鬼草紙

餓鬼草紙

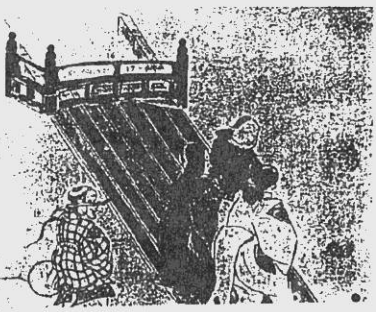
図－１９　春日権現験記

図－２１

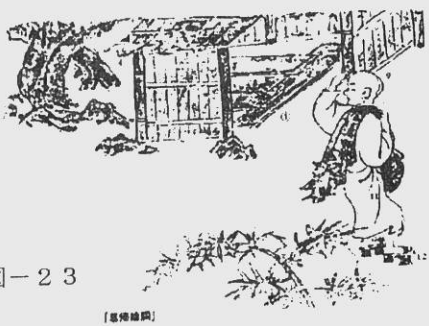


桶箱
（桜川直樹「トイレ考」TOTO）

図－２０　信貴山縁起



図－２２
町田本洛中洛外図屏風



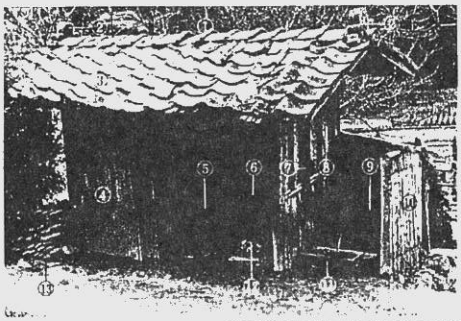
図－２３
「慕帰絵詞」

図－２５

ちゅう木

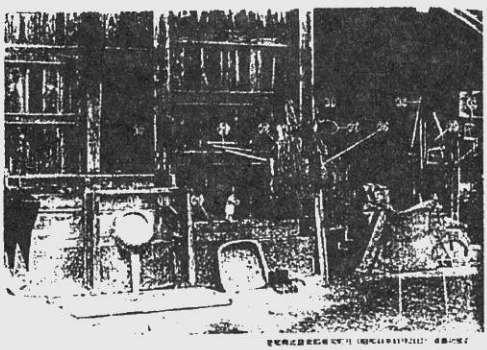
青森県十和田市（撮影年不明）生出区撮影

図－２４



長野県下伊那郡阿智村（昭和四年）横谷元一撮影

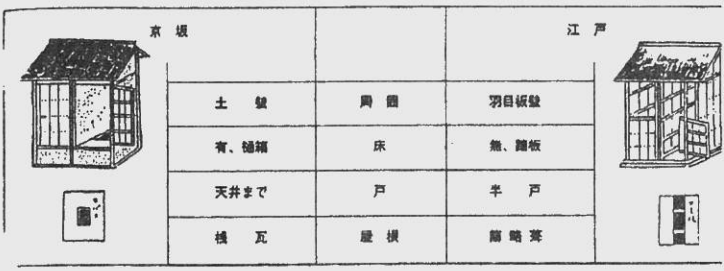
図－２６



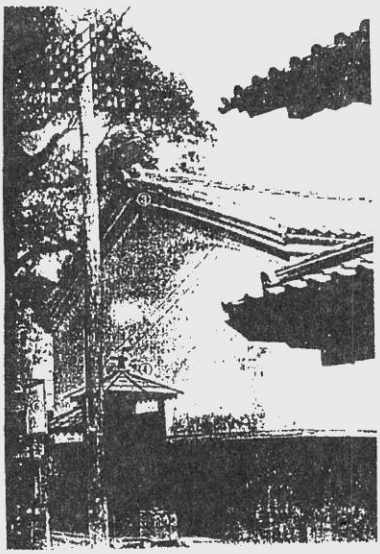
図－２７

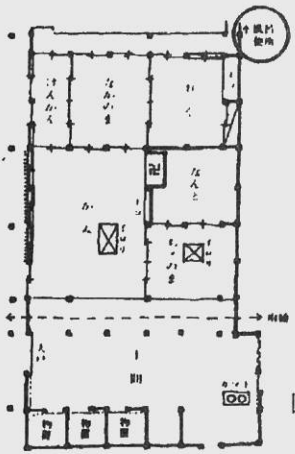
岡山県阿哲郡哲多町（昭和46年３月）長谷川明撮影

図－２８



図－２９

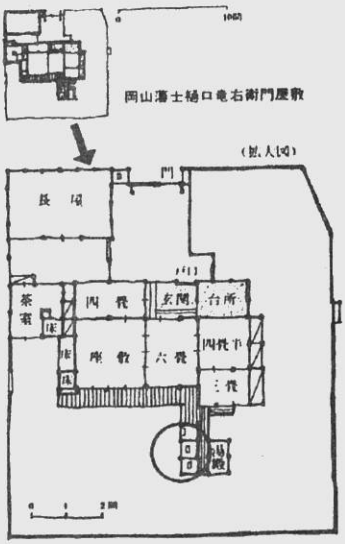




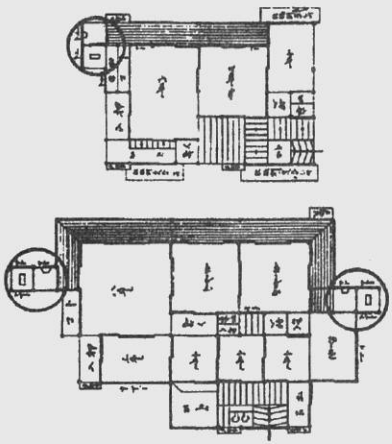
図－３０

分棟型の農家

図－３１

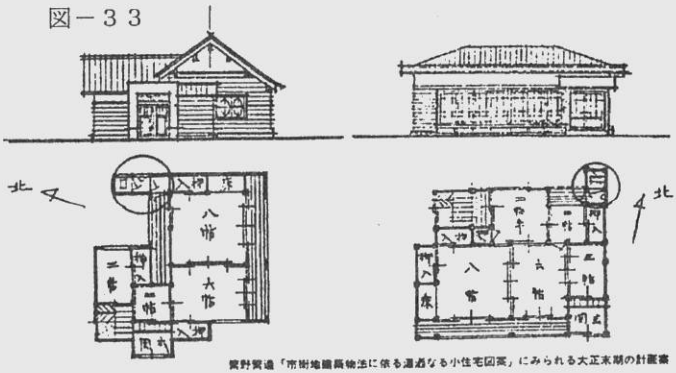


図－３２



明治10年頃東京に建った住宅

図－３３



貴野賢造「市街地建築物法に依る適合なる小住宅図案」にみられる大正末期の計画案

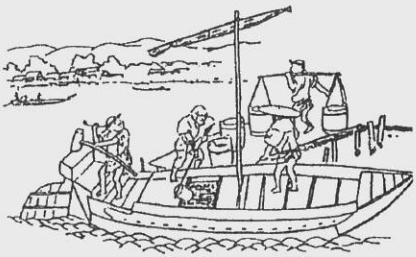
図－３４

可笑記より

図－３５

東京市街風景の一つ、肥桶を運搬している
（「マンガ明治・大正史」金森達生、現代教養文庫、社会思想社）

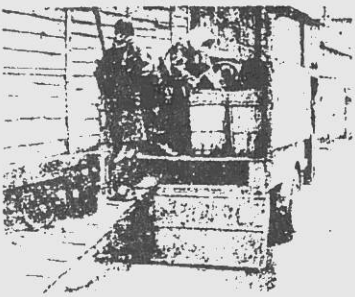
図－３６



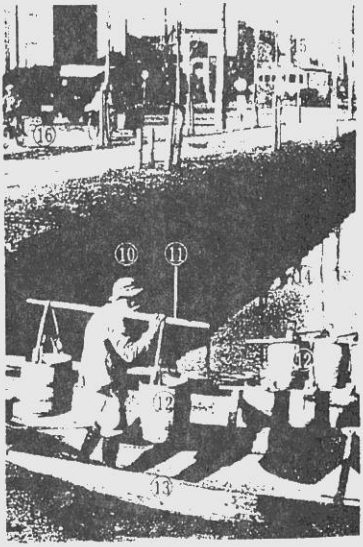
江戸かわや図絵より

図－３７

図－３８

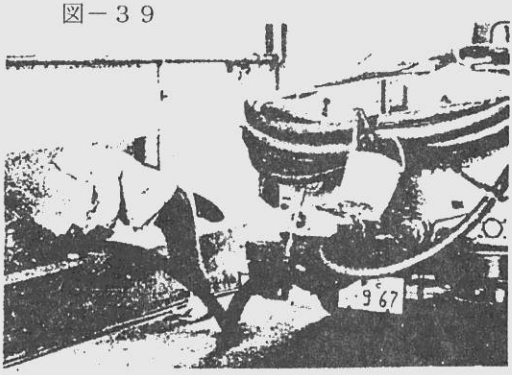


肥桶への汲取り風景〔柏崎市史資料集，近現代篇３上，明治・大正・昭和（写真資料），上巻，柏崎市史編さん委員会編，柏崎市史編さん室，1985〕



高知県高知市帯屋町（昭和25年4月）
高知新聞社提供

図－３９



バキュームカーによる汲取り〔柏崎市史資料集，近現代篇３上，明治・大正・昭和（写真資料），上巻，柏崎市史編さん委員会編，柏崎市史編さん室，1985〕

図－４０

自 昭和12年
至 昭和18年　**ふん尿終末処理実績（１日当）**

処理別＼年別	昭和12年		昭和13年		昭和14年		昭和15年		昭和16年		昭和17年		昭和18年	
	石		石		石		石		石		石		石	
農村還元	21,026	8	17,586	7	19,086	5	20,293	0	16,575	7	19,986	0	19,119	0
農村汲取	1,602	2	1,392	6	1,355	0	1,303	0	622	3	209	0		
海洋投棄 大型船	2,800	2	3,928	6	4,699	1	4,649	2	4,269	0	3,115	0		
海洋投棄 伝馬船	1,861	5	6,917	6	9,374	6	11,923	2	14,389	1	11,582	0		
海洋投棄 計	4,661	7	10,846	2	14,073	7	16,572	2	18,658	1	14,697	0	14,484	0
綾瀬	1,041	1	717	0	759	0	832	5	490	8	488	0	463	0
其の他	745	0	1,164	2	540	5	709	3	2,095	1	2,308	0	639	0
下水道													322	0
三河島													577	0
合　計	29,076	8	31,706	7	35,814	7	39,710	0	38,442	0	37,688	0	35,604	0

図－４１

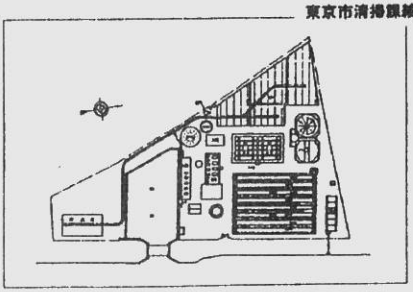
昭和10年、海洋投入船「むさしの丸」竣工

図－４２

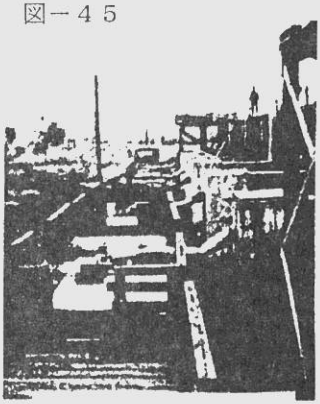
明治末洛中洛外図屏風

図－４３

東京市清掃課綾瀬作業所



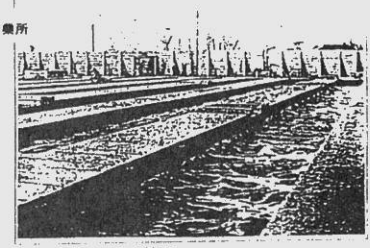
図－４５



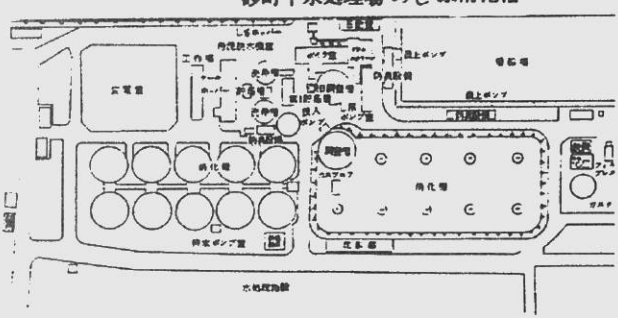
昭和19年、西武鉄道による
し尿の貨車輸送開始

図－４４

東京市清掃課綾瀬作業所



曝気槽

図－４６

砂町下水処理場のし尿消化槽